
取説ッ! (とりせつッ!)

橘 猫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

取説ッ！（とりせつッ！）

【Nコード】

N9928Y

【作者名】

橘 猫音

【あらすじ】

人類全てが能力者と成った某年。「星村渚」は能力強化二次校、熊咲高校高等部戦技科の受験会場に居た…

熊咲学園高等部入試会場にて彼女は…（前書き）

少々の残酷な表現があります（´・ω・｀） 以上ですb

熊咲学園高等部入試会場にて彼女は…

受験番号37

星村 渚 一枚の紙のまえに彼女の端麗な顔に普段のいたずらな笑みは消えていた、代わりに彼女は苦笑いで口元をつり上げていた

（ぜ…全然解らない…!）

此処は熊咲学園高等部戦技科入試会場

傭兵志望の生徒が集まる能力育成二次校だ

（能力育成特種校だからってなめてかかってたかも…大丈夫かな…？）

数時間後

キンコーンカーンコーン

彼女の答案は全て五割埋まらずに無情にも筆記試験終了のチャイムが鳴った

（おっ…わっ…たあーっ!）

「ふいー…終ったあ！ なあお前どーだったよ？」

「俺？ちよーびみよー（笑）」

男子の受験者の傷の舐めあいが耳に入る

（僕…エリア4出身だし、誰も知り合い居ないだろうなあ…）

覚悟は出来ていただろうが彼女もやはり寂しいところはあるらしい

XX03年 地球は全部で423のエリアに分けられていた

そのなかでもかつて日本と呼ばれていた島はエリア3からエリア7までの5つに分けられている とはいえエリア3とエリア7は人類を脅かす境獣ケイジユウとよばれる生き物を隔離…というかそれらが野放しになっている地域な訳だが

キンコンカーンコン

チャイムが鳴り放送が入る

「筆記試験お疲れ様です、次は実技試験ですので、受験者の皆さんは10分間の休憩の後、会場の前に5人ずつ試験番号順に並んで下さい」

実技？面接じゃないの？ と思った人もきつと居るだろう

此处は戦技科だ

実技試験では戦闘のプロ つまりプロの傭兵とのゴムナイフを使った戦闘となる

プロの傭兵から見ての戦闘における素質及び5組の戦闘が同じフロアで行われるため、周囲に注意を向けながらの戦闘になるため、常

に変化する戦場に適応するための適応力も同時に試される

（此处で取り返さないと…でも…ちょっと怖いなあ…）

傭兵は戦闘のプロだ　どんな状況でも焦ることは無く冷静な判断が出来るものだ

つまり「一瞬のスキが命取りになる」ということだ

ハンデとして事前に割り当たった相手の戦歴のデータが受験者に渡される

（僕の相手は…「久茂風羅」^{くもふうら}　両手両肩に武装強化の能力を持つ27歳の男性…　武装強化か…嫌な相手に当たったな…）

今回の戦闘はゴムナイフを使った模擬戦だ

受験者の怪我、死亡を防ぐため、武装強化の能力は封じられているだろう

そういう意味ではハイパワーやロックオンの能力に当たった者より有利かも知れない

だが、相手の能力は武装強化　普段から特種工作などで他の傭兵よりナイフの扱いは数倍上手いだろう

（僕の不安定な使い方も解らない能力でどこまでやれるんだ…？
ここで周りより長けていなかったら…っ）

星村渚の能力は左足がヘビーガード（重化）右足の能力はマッハス

スピード（音速化）だ、希少な劣性遺伝子の高速化能力も、片足だけでは高速接近も出来ず、意味を持たない、しかもヘビーガードで余計に重みを増し、上手く扱えなくなる

ちなみにこの時代には、万人に能力が存在するとされた

能力の歴史は230年前

地球の一部に前触れもなく「境獣」が出現しはじめた

境獣の出現により、人類の存亡が脅かされた、そこで人類は彼らに対抗するため、両親の精子、卵子の力を司る第5染色体に「身体能力上昇」の遺伝子を組み込んだ。

そこで産まれた多数のニュータイプ（強化人類）は人類と共に独自の発展を遂げ、現在に至っては6種類とその他の数多くの能力が展開している。

まず渚の右足の類の能力「スピード（高速化）」体の一部を他よりも早く動かす事が出来る、劣性遺伝子なので限りなく子供に受け継がれにくい能力で希少とされる。人によって速度は違うが渚の場合かなり上質な物なので「マッハ（音速）」で動かす事が出来る。残念な事に「右足だけ」なのだが。

次に渚の左足の能力「ガード（硬化）」体の一部を他よりも硬くさせる事が出来る能力、此方は優勢遺伝子なので他の遺伝子より子供に受け継がれやすい。人によって硬さは違うが渚の場合はかなり硬質なので、重量化も進むそのため「ヘビーガード（重硬化）」と呼ばれ重宝される。残念な事に「左足だけ」なのだが。

今回の渚の対戦相手「久茂風羅^{くもふうら}」の持つ能力は「パスワード（武装強化）」体の一部に持つ（装備、装着している）武器、防具を強化する事が出来る能力、たとえゴムナイフですら、武装強化の能力があれば殺傷力の高いナイフに変える事が出来る。金属に急反応する境獣の討伐やバリケードの破壊など、特殊工作を主に担当する、はたまた傭兵意外にも、金属アレルギーの患者専門の外科医などの職に付いている能力者も少なくない。

この他にも、筋力を上昇させることの出来る「ハイアタック（肉体強化）」脳内で闇所でも相手の位置を脳内で把握し、直接攻撃を仕掛けられる「ロックオン（脳内索敵）」一部の体の形を変形させる事が出来る「ボディチェンジ（肉体変化）」の3つの種類の能力がある。

この6つの能力が主な物だが…能力のなかには突然変異により発生した特異な物もありそれらは厄介とされ、社会から偏見の目で見られる者も少なくないようだ…例を上げると口からの放炎「フアイア（放炎）」肌の冷化「スキンアイス（冷却化）」痛みを一時的に消すことが出来る「アネスタスイ（無薬麻酔）」中でも厄介なのが…ある一定条件で何が起こるか解らない解明不可能の能力「フリーダムフールド（無益無決）」だ。

この学校にも上の様な特異能力を持つ人間が少数だがいるようだ。

キンコーンカーンコーン

チャイムがなり、アナウンスが流れる

「34 35 36 37 38 以上の受験番号の生徒は会場にお入り下さい」

（本当に…大丈夫かな…？）

果たして私は使えない能力に頼らずに、久茂風羅にどう立ち向かうのか… 彼女は心配を抱きながら会場となる模擬戦室へと入って行った。

熊咲学園高等部入試会場にて彼女は…（後書き）

最後まで読んでくれた皆さん有難う御座いますw
今まで頭の中で妄想して居た作品ではあつたのですが、中々投稿するまでに至らなかつたのでしたw 今後とも、不定期ながらも制作予定なので、宜しければ宜しくお願いしますb

No.25 倉庫にて（前書き）

模擬戦室と呼ばれる部屋に実技試験の為入った星村渚を含む受験No.24～No.28の受験生が目にしたのはコンテナが並ぶ「倉庫」の様な場所だった。そこで星村渚は周りとは違う一見変わった少年と出会う…

No.25 倉庫にて

受験番号37

星村渚が実技試験の為に入った一室「模擬戦室」はコンテナで視界が少々遮られ、床は渚の体育館のようなイメージとはかけ離れた、倉庫のような場所だった。

（こ…ここでやるのか…）

少しばかり怯えた表情が顔に出る

誰かの唾を呑む音が聞こえる

ビーツ

突然の警告音に受験者全員の体がビクツと痙攣する

静然とする模擬戦室にさつきとは明らかに違う　ドスの効いた男の
声のアナウンスが流れる

「受験者は指示の後、所定の場所に移動しなさい　繰り返す　受験
者は指示の後、所定の場所に移動しなさい。　尚移動完了時から戦
闘開始とする　…それでは動きなさい」

暫くは誰も動かなかった

しかしロクオンの能力者だろう、一人の少年が頭に浮かんだ平面地図に相手の位地を把握したのか、歩き初め、次第に走り始めた

少年につられてか、他の受験者達も移動を始めた

最後にその場に残ったのは星村渚と、黒髪の手だけを赤に染めた目の切れ長なスラッとした風貌の少年だけだった

「お前、行かないんか？」

少年が渚に追突に声をかける

「えっ…？」

どう反応していいか解らず返答に困りおどしている渚に少年はもう一度声をかける

「んー、なんや、じゃあ質問変えよ。お嬢ちゃん…どんなぱんつ履いてるん？ お兄さんに見せてごらん（笑）…」

ニヤニヤした表情を浮かべた彼の台詞には昔から変わらない「大阪弁」の響きがあった

（へっ…変態さんだ…！！）

「で、ぱんつ…って…わーっ 待て待て！逃げんでくれっ（汗）」

目を丸くしながらも後退りして距離をとる渚に彼は引き留めた

「冗談や冗談（笑） 和やかな雰囲気作る思たんけどな、なんで嬢ちゃんが動かないか位わかつちゅーよ 彼奴らみたいに馬鹿じゃないからやろ？」

「えっ…？」

ただどうすれば良いか解らずおどおどしていただだけの渚にはなんの
ことが解らなかった

「だから、この戦のルールもよう解らん戦いで真っ先に動いたらど
うなるか解つとるんやろ？」

ちょっとわざわざ説明するのが面倒くさそうな顔で彼が言った、
その直後

機械のような淡々とした口調でアナウンスが流れる

「受験番号25番 前原遼 敗退です 敗因はロックオンの能力に
より標示された脳内地図を頼りに相手の 黒谷 直哉を探すも、平
面地図だったため、コンテナの上までは確認できず、上方から降下
してきた黒谷に背後をとられ、ゴムナイフを首元に当てられ自動降
伏敗退。」

ニヤリと怪しい笑みを浮かべ、ほらな という大阪弁の男子受験者

(…最初に動いた人だ…！ほんとにやられちゃったんだ…)

冷静だが相変わらずな口調で彼が言う

「なるほど… 今んで解つたんは、相手にも自分のデータが渡つて
て、ある程度作戦を立ててきてるちゅーことやな さて…そろそろ
行こか」

「あつ…あの、一応お名前お聞かせしてもらってもいいですか…？」
彼は絶対に合格する、高校に入学したあと何かあつたら力になってくれる

そう思つた渚の口から衝動的に出た言葉だつた

「ん…？ 俺か？ 普通は教えないんやけどお嬢ちゃん可愛いから特別に教えたる（笑） 俺は受験番号34 「神足蓮麻^{しんそくれんま}」や、宜しくな（笑） ほなそろそろ行くわ」

大阪弁の少年、神足蓮麻はポケットに手をいれてだらだらとコンテナの陰に消えていった。

（神足蓮麻さんか…変わった人だつたな… それに確か「神足」っていう名字 京都って呼ばれてた地域に多いんだよな でも蓮麻さんは「大阪弁」だつたな…？）

「あつ…皆居なくなつちやつた 僕も早く行かなきゃ！」

独りでぼんやり考えていたことに気付いた渚はそういうと小走りに所定場所のライン5に移動し出した。

No.25 倉庫にて（後書き）

最後まで読んでくれた皆さん有難うございましたb

今回二回目の投稿は、少々間取りがおかしく、読みずらかったかもしれませんwすいませんでした。

実は絵も入れたかったんですが、絵には自信が全然ないものでw
見なさんの妄想力にお任せしますb

武装錬師（前書き）

星村渚は所定場所のライン5に移動し、久茂風羅と対峙するが…

武装錬師

受験番号37

星村渚は威嚇するような眼差しで長い黒髪を後ろで結んでいる眼鏡をかけた…明らかに戦闘服ではない、執事のきちつと着こなしている目付きの優しい若い男を睨んでいた。

「貴方…が久茂風羅さん…ですか？」

「はい。私の相手は可愛らしいお嬢さんですか、私は久茂風羅、因みに英名はリリック・パートルです。よろしくお願いします」

久茂風羅、英明リリック・パートルは冷静かつ紳士に言った。

もう一度言う彼は紳士に言った、だが彼の手はしっかりとホルスターのゴムナイフに伸びている。いつでも飛び出せる体勢だ。

「それでは始めましょうか…行きますよッ！」

地面を蹴るようにして低い体勢で飛び出し一気に渚に接近した。

空中でホルスターからナイフを取り出す。

(…!!)

全く無駄の無い動きに対応するため、渚もナイフを取り出し構える。相手の構えは突きだろう、渚はそう思ったのか軽く膝を曲げ、サイ

ドステップの構えをする。

しかし

久茂は構えたナイフを軽く揺らただけだった

（なっ… あッ…！！ サイドステップじゃ…っ！！）

そう渚が頭で判断した頃には既遅かった

渚の体はもう既に横に飛び退けていた。

久茂風羅は「予想通り」と言わんばかりにニヤリと笑い、横に飛びのけた渚の横を素通りする。

素通りして逃げ出した訳ではない、久茂風羅は右足に力を入れ、ターンを効かせ、背中を向けている渚の方を向いた。

（僕と久茂風羅との距離は訳3メートル、ターン後の走り出しを計算に入れても2・3秒程度…この時間で出来る事は？　なんだ？　何がある？　！　そうだ…！）

渚には自分の身を案じるという考えは無いようだ。

渚は横蹴りの構え、左足を右の膝の辺りまで横向きで持ち上げ「鶴足立ち」の姿勢をとる。

その足を右側、灰色ベースにかすれた青のペイントが少し残っているコンテナに上段横蹴りをかます。

コンテナに足が当たる直前、彼女の足が鋼鉄になる。「ヘビーガード重硬化」の能力だ。

鋼鉄となった足がコンテナに思い切りぶつかる。

高さ3メートル横幅4メートル縦幅3メートル程度の小型のコンテナの1・7メートル位の地点に大きなへこみが出る。

コンテナが潰れ、斜めになり、台形のような形になる。するとどうなるだろう、上に重なっていた4個のコンテナがバランスを崩し倒れてくる。

「なっ…!？」

久茂風羅が目を見開き、驚きの声を上げる。

渚は回避行動を取り、コンテナ倒壊の被害範囲から出る。そしてしやがんだまま後ろを振り向き、いつもの悪戯な笑みを浮かべる。

ガラン、グアシャ、そんな音を出して崩れ落ちるコンテナ

先頭範囲内から出たらその時点で自動に敗退が決まる

通路は塞がれた、サイド5範囲内に相手に最短で通過出来る通路は二本、左右どちらに行くかによって勝敗が決まると言っても過言では無いだろう

(聞くんだ…音を…相手はどっちに動く…)

カラン

中心を渚として、わずかに左から鉄片に何かが当たる音がする

（左か、それなら右から少し早い速度で移動し相手の背後に周り込むのがいいかな…）

音を建てないように慎重に、渚は小走りに右のコンテナの角に向かって動く。

一つ目の角を曲り、二つ目の角を曲がった所

そこには正面に悪意のこもった笑みを浮かべる久茂風羅が居た。

久茂風羅は後ろに回り込む事もせず、正面からナイフを振り上げ、渚との勝負を終わらせようとしている。

彼の右手に握るナイフは

金属光沢（金属が持つ独特の光り方）をしていた

（え…なんで？　なんで？　なんで？　…？）

渚は戸惑いの表情を隠せずに、臆顔を隠せずに立ち止まっていた

「貴女の負けです」

久茂風羅は少し腕を後ろに曲げ、ナイフを振り下ろす。

反射的に膝を少し曲げ、頭を腕で守った渚の頭のスグ上で、久茂風羅のナイフ動きが止まる

寧ろナイフは後ろに引つ張られているようにも見える

久茂風羅の後ろ、ライン7から声が聞こえる

「すまんなあ兄さん、俺の勝ち、終わりや」

「大阪弁」のなまりがかかった、男の声だった。

神足蓮麻は、部分部分に金具の付いた濃い緑の戦闘服を着ている男にコンテナに足を放った状態で寄りかかり、ゴムナイフを首に当てている。

（なんだ、解らない、でも…この状況…なんとか出来るぞ…！）

渚は左足に力を入れ、ヘビーガードを使うい、踏み込み、右手で無防備に腹部を出した久茂風羅の腹を拳を握り、腕を突き出し、殴ろうとした。

キュイッ カラカラ 音がする、何かがおかしい、渚は気付いた、だがもう彼女の体は動いている、止まらない。

鉄片が引き寄せられる、その中で、彼女の踏み込んだ左足がライン7の方向にじりじり引つ張られていた。

（ダメだ！ これじゃあ…力がはいらないっ…）

彼女の体は相手の体に拳を食い込ませるべく、前傾姿勢になる。

その時

(…!!)

彼女の体が不意に揺れた。

彼女の右手は、瞬きが終わった頃には既に久茂風羅の腹部に食い込んでいた。

渚は仰向けに倒れた久茂風羅の前に膝を付く。

「あッ… か… んあッ… 腰がッ… 腕がアッ… がッ… 痛いッ… 痛い痛い痛いッ!!」

之は久茂風羅の声ではない

久茂風羅は既に血を吐いて気絶している。

渚の頬には痛みによつて流れた涙が伝っていた。

大声で叫んだ後、渚は体を縦に保てず、久茂風羅の上に倒れ込んだ

(僕… あれ…? なんで…)

薄れゆく意識の中、彼女が最後に聞いたのは

「N O ・ 2 5 神足蓮麻 勝利による戦闘終了です。 N O ・ 2 7 星
村渚 救護班は…」

機械の様な淡々とした口調のアナウンスだった

武装錬師（後書き）

今回で3話に入りましたが、まだ慣れ無い所が見えますねww まだまだ未熟な自分ですが、皆さんから「文章力が無い」や「下手くそ」など、ご指摘をいただけると嬉しいですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9928y/>

取説ッ！（とりせつッ!）

2011年12月4日03時59分発行